

# Thomas Pynchon: *The Crying of Lot 49*の精神分析的研究

米塚 真治

## 目次

### はじめに

#### 1 象徴的側面：言語と自己差異化

##### 1. 1 意味作用の根源を求めて

##### 1. 2 根源の無いことと、示差体系としての言語記号

#### 2 現実的側面：集団とパラノイア

##### 2. 1 ビオンとカーンバーグの理論

##### 2. 2 アメリカ社会とパラノイア

#### 3 ヒロインの経験

##### 3. 1 疎外と包囲

##### 3. 2 自我の崩壊

### 結論

### 註

### 付録 エディパのパーソナリティについての所見

### 引用文献

### はじめに：

*The Crying of Lot 49*の精神分析的視点からの読解が本稿の目的である。プロットについてラカニアン的な分析（皆さんにはお馴染みの議論）を行い、加えて集団心理学と対象関係論的自我心理学の知見を導入し、作品に関する新しい枠組みを提供する。付録ではヒロイン、エディパの特性についてもコメントする（\*レジュメは「結論」をご覧ください）。

## 1 象徴的側面：言語と自己差異化

### 1. 1 意味作用の根源を求めて

まずプロットについて段階を追って、ほぼクロノロジカルに説明してゆく。

エディパ・マースはピアス・インヴェラリティの遺言執行を任される。彼の遺産とは？彼女は「不真実」を突き抜け（*pierce*）て真実なるものに到達しよう<sup>1</sup>と探索を開始する。最初の探究の形式としては、当然のことであるが、「意味されるもの」を探そうとすることになる。「ここに意味されているのは何か？」と、謎めいたものの背後に神秘の意味を探そうとする。

坂の上から見おろす。（中略）電池を変えるためにトランジスター・ラジオを開け、印刷された回路をはじめて見たときのことを思い出した。家々と街路の秩序ある渦が、この高い角度から見おろすと、あの回路板と同じように、ふいに、おどろくばかりの鮮明さで、いま、こちらに跳びかかってくる。ラジオについては、南カリフォルニア人にたちについての知識ほどもなかったが、そのどちらについても、外面のパターンに一種神聖文字<sup>ミステリウス</sup>な感じがあって、意味を秘めているよう、何かを伝達しようとしているようだ。印刷された回路には（エディパさえ探り出そうという気になれば）語るこののできそうなことが限りなくあるように思われた。同様に、サン・ナルシソ市を見た最初の一分間、一つの啓示がやはりふるえていたのだ、きわどいところで彼女の理解の閾を越えていたが。（25/24）<sup>2</sup>

引用中「啓示」（*revelation*）という語に注意。次は作中「ボッティチェリ式ストリップ」（40/36）と呼ばれる場面の回想。

このようにして、エディパにとって、＜ザ・トライステロ＞はゆっくりと不吉に花ひらきはじめた。（中略）まるで紐を一つ引けば分解して落ちるガウン、網目のブラジャー、宝石をちりばめたガーター、バタフライなど、人間の形をした「歴史」が身につけた、たちまち落ちるような品々は厚く層をなして、あの、ベイビー・イゴール映画の前でメッガーとやったゲームの、エディパが着ていた数々の衣装のようなのだ。まるで暁をめがけて飛びこむようなもの、＜ザ・トライステロ＞がその凄まじい裸身となって正体を示すまでには、いつ明けるとも知れぬ暗闇の時間が必要だというふうである。（64/54、強調は私）

態度の変化。傍点を打った一節が示すように、分厚く重なった暗喩の背後に裸形の意味を見いだすことが重要である、とエディパは思い始める。層をなしている意味の群れの背後に、真の意味というようなものがあるのではないか？

そこで、探されるのは意味されるものよりむしろ意味作用の根源・究極の意味の付与者であるということになる。その、遺産に意味を与えているのは、ピアスではないかとエディパはとりあえず考えるはず。

その彼の名のついた「インヴェラリティ湖」があること(66/56)。ピアスの入水というエピソードが存在すること、また、のちにエディパは意味探索に疲れると水のほとりへ行ってピアスに呼び掛けること(共に202/162)。これらが示唆するように、海ないし湖が意味作用の根源ないしその入り口のメタファーとなっている<sup>3</sup>。

さらに次は前出「ストリップ」と同じシークエンス。

メツガーが泣き声で「はく、こわい」。小型潜水艦のなかはめっちゃめっちゃになり、犬はあちこち涎をまきちらして走りまわり、その涎が隔壁を洩れて流れこむ水しぶきと混じり合う。その浸水箇所父親はシャツを詰めこんでいる。「道は一つ」と父親が大声を出す―「海底まで行って網の下をくぐり抜けることだ」

「とんでもない」とメツガーが言った―「網には門が作ってあるんだ。ドイツのUボートがそこをくぐり抜けてイギリス艦隊を攻撃しに行くんだから。われわれのE級潜水艦もみんなその門を使わせてもらっていたんだ」(36/32, 強調原文)

潜水艦のビデオ、海底まで潜って意味体系のネットワークの下を抜けること(ピアスが入水したのもそういう意図かもしれないし)。湖の底に投げ込まれる人骨(74/62)。

さて、この「海」の上で知られざる海戦が行なわれたことがある、という挿話が語られる。

「どっちでもいいことですよ」とファローピアンは肩をすくめてみせた―「はくたちは、そんなことを聖典につくりあげようとはしないんです。もちろん、それでは南部の聖書地帯<sup>ベイル・ハ・ベール</sup>の支持をずいぶん犠牲にしまうわけです。はくたちの一大地盤になってもいいところですけどね。昔の南部地方ですね。

しかし、これこそロシアとアメリカの最初の軍事的対決だったのです。攻撃、報復、両軍の砲弾は永久に海に沈み、太平洋はきょうも渦まく。けれども、この二隻の船のはね飛沫から生じた波紋はひろがり、大きくなり、今日ぼくたちぜんぶを巻きこんでいるのです。

「ピーター・ピングイッドこそ、ほんとうは、わが国最初の犠牲者なんです。ぼくらより左がかっている<ジョン・バーチ・ソサエティ>の仲間が殉教者に仕立てあげようとしている狂信者とは、わけがちがいます」

「それじゃ、提督は殺されたの？」とエディバはきいた。

ファロービアンに言わせると、殺されるよりもっとひどいことになった。ロシアの船と対決ののち、奴隷廃止論のロシア（ニコライは一八六一年に農奴を解放しました）と、工場労働者を一種の賃金奴隷の地位に縛りつけておきながら口先だけは奴隷廃止を唱えていた北部が、どう見ても軍事同盟を結んでいたとしか考えられないのに愕然としたピーター・ピングイッドは、何週間も艦長室にこもりきりで黙想したという。  
(59/50)

反共団体「ピーター・ピングイッド協会」の代表ファロービアンが語るところによれば、この際北部資本主義とロシアが密約を結んで南部を陥れたという。『「産業資本主義は、どうしても、マルクス主義に進まざるを得なかったでしょう？深いところでは、どちらも同じ、ぞっとするようなおぞましさを共有しているんです』』（同）。テキストの上ではこれと相前後して、北部資本主義による私設郵便の抑圧の話が語られる。すると、いままでに出てきたいくつかの概念が二つの極にそれぞれ等号で結ばれて整理されることになる。

「意味作用の根源」という極には、ピアス、南部（ナショナリストの基盤・アメリカの原イメージ）、「救済となる」（註3参照）海、ファロービアンすなわちファロス（ラカン的な意味での）。

これに対して北部の産業資本主義とロシアとが結ばれて、対置される。ロシアはこの小説の書かれた冷戦時代にあって仮想敵であるが、それをここでとり上げているのだ。この後テキストではナチスのイメージも出てくるが、アメリカにとってのロシア、ドイツにとってのナチスは同じ構図を示している。すなわち、「根源」がわにとって異質なものを外に仮設し敵視するという、集団パラノイアの基本的な構図がここで最初に提示される。

（この、アメリカ社会のなりたちというのが小説の現実レベルの話になって、

あとでつながってくるわけだが後述することにして、意味作用の根源云々という象徴レベルの話が続けると、)

## 1. 2 根源の無いことと、示差体系としての言語記号

啓示の数々は、一ヶ所に集中して根源の存在を示すというより、たんに連鎖してひとつの体系を形成しはじめる<sup>4</sup>。ピアスの残したもの、ヨーヨー・ダイン社が「トライステロ」という地下組織、裏の王国とつながっていることがわかってくる。このトライステロは支配的なものに思える。「昨夜のうちなら、彼女の知っている二例以外にWASTE組織によって通信する地下組織などあるものかと思ったかもしれない。日の出までには当然ながら、WASTE組織を使わない地下組織などあるかという気持ちになった」(154/124)

どうも真実なんか掴めないんじゃないかと思い始めるエディバ。彼女の探索は途中まではすらすらと進むが、どうも話がうまくいきすぎていると気付くのだ。はたして行き詰まる。

こう気づいたきっかけは、偶然上演に行き合わせて以来気に掛かって調べていたジェイムズ朝時代の悲劇 *The Courier's Tragedy* と、第二次大戦中のイタリアでの米軍兵士たちの悲劇的な戦死との重なりに気付いたことにある。じつはこの劇の台本が本来の版の異本（トライステロに関係する）であることが判明する。彼女が上演を見たのは異本で、調べていたのは本来の版だった。このように、ずれていって根源に到達できないしくみなのではないか？

重なり（ダブリ）と微妙なずれというテーマが現れる。トライステロにかかわるものは、オリジナルに重なってしかも微妙にずれている。彼らの郵便組織が発行する切手の図柄しかり。“Potsage,” “Potsmaster” といった用語しかり（いずれも218/174）。

さらに露骨に起源に関する沈黙も現れる。消音ラッパ、すなわち消音させる＝起源を消去すること。

黄金のひとつ輪の喇叭はただ沈黙<sup>しじま</sup>、という台詞をエディバは思い出した。やっぱり。「すると、さっきの透かしは」とエディバは言った—「ほとんど同じものだけど、鐘形のところから出かかっているような感じの、ちょっとしたものが余計ね」「ばかげていると思われるかもしれませんが」とコーエン—「私の推測では、それは消音器<sup>けうおんき</sup>です」

エディバはうなずいた。黒装束、沈黙、秘密主義。彼らが何者であったにせよ、目

的はテュールン、タクシスの郵便喇叭を消音することであった。(119/97)

また *The Courier's Tragedy* の芝居中での沈黙。

じっさい、芝居のここらからなのだ、何もかもほんとうに特異な色を帯びはじめ、そこはかたない冷気のようなもの、ある種の曖昧さが台詞の中に忍びこんでくるのは。これまで、名前を名づけるのは文字どおりか、隠喩としておこなわれていた。しかし、いま、公爵が殺害の命令を下すに当たって、新しい表現形態が取って代わる。一種の儀式化された躊躇としか呼ぶしかない表現形態である。ある種のこともは声に出して語られないことが明示される。(中略) だれが追っていくのか? ヴィットリオにはわかっている。宮廷の使用人たちはみなスカムリアの制服を着て歩きまわりながらも意味をこめたまなざしを交わし、わかっているのだ。まったく大仕掛けの、内輪の冗談のようなもの。この時代の観客にはわかっていたのだ。アンジェロは知っている。が、言わない。近いところまでは言っても、明らかににはならない。(85/71)

この「ずれ」と「起源の消去（起源の無）」からエディパが気付いているのは、あるいは読者が気付くのは、いわゆる、言語というものの示差性、またそれゆえの恣意性である。

彼女が初め意味を探索する過程で材料を集め、体系を築いてゆくと、その体系が各シニフィエ同士の示差性によってつくられているのはもちろんわかるわけである。ところが（話はまだ先があつて）、さらに体系自体がなにに基礎付けられているかといえ、それはファルス（根源）に意味付けられているというわけではなくて、当の体系と微妙にずれたべつの体系を仮設することによって示差的、自己差異的に作られているのではないか。——それがここで出てくるアイデアである。

具体例としてテュールン&タクシスとトライステロの不可分の関係をあげる<sup>5</sup>。後者は創設者が前者の臨時責任者の従兄を詐称するところから始まり、前者組織の模倣・攪乱により一貫して「鏡像」「影の王国」でありつづけた。次章冒頭の引用(206/165)にあるように、神聖ローマ帝国というファルスの消失以後、両者が表と裏で互いを意味付け合い支え合った（a）のである。現在の現実にあつて、自己差異により起源がなくなるさまは次：

事態が進行するにつれて、あらゆる種類の啓示が出てくることになった。ピース・インヴェラリティにも、エディバ自身にも、ほとんどかわらないことなのだが、これまで存在しながら、なぜか、今まで見えなかったものにかかわっていた。なにが干渉阻止的な、絶縁的な感じが立ちこめていて、ある種の強度というものが不在であることにエディバは気づいていた。まるで、わずかにそれと感じられるくらいに焦点がぼけているのに映写技師がなおそうとしない映画を見ているようなのだ。(21/20)

起源（根拠）が主体には見えない（ない、とすれば恣意的といってい）<sup>6</sup> ことによって、言語は主体に対してエイリアンなものとして現れる。象徴界というものの定義どおり。（エイリアンなものの恐怖にかられてピースを呼ぶエディバの声がテキストに書き込まれている。）

## 2 現実的側面：集団とパラノイア

ここまでは象徴界レベルの話。言語というものはもちろんそういうものだ。また、そのメタファーとしてトゥールン&タクシスという社会集団の話が出てくるが、しかしお芝居、昔話にすぎない。だが、エディバはたんなる象徴レベルの話で恐怖に駆られるのではない。彼女はトライステロが支配的である、それが現実であると言っているのだ。これはお話と現実の区別がつかなくなったエディバの妄想なのか？ それとも、その、区別がつかないというのが本当のところなのだろうか？ 言葉の国、verbal なりたちをもつアメリカでは後者である、いいかえれば言語を媒介にして文学論と社会論が重なるというのがこの作品のもたらす卓抜なアイデアである。

かくして神聖ローマ帝国が滅亡すると、テュールン、タクシスの正当性の本源もほかのすばらしい妄想とともに永遠にうしなわれる。パラノイアのひろがる可能性がいたるところに現われる。トライステロが部分的にもせよ秘密を何とか維持して来たとしてれば――テュールン、タクシスに自分たちの敵がだれなのか、その影響力がどこまで伸びているか、はっきりわかっていないとすれば――その場合、彼らの多くが信じるようになったにちがいないものは、スカーヴァム宗徒の信じた盲目の、機械的なアンチ・ゴッドに似ている。(206/165)

上の意味は前出（a）のほか、（b）T & T 分裂後トライステロは公権力一

般に対するサボタージュを行なってきたが、それは社会一般の示差的なありようを表象している、ということ（スカーヴァム派はピューリタンの一派、後述アメリカ国家のなりたちを指示）。

## 2. 1 ビオンとカーンバーグの理論

そこで、現実の社会レベルの話（自己差異が実際にどのような形で析出されるか、及びその理由）をおさえてゆく。作品の社会集団を説明するために、集団心理学の知見を援用するのが有効である。ウィルフレッド・ビオンは集団について次のように考えている。<sup>7</sup>

### [図1]

W・R・ビオンの“basic assumption”（集団の基本形）

グループ内の問題を解決するため用いられる幻想の種類により、三タイプに分けられる。

依存(dependency)グループ：神・至高善（としてのリーダー、外的対象）にすべてかかる。教会が典型

闘争・逃走(fight-flight)グループ：悪い対象を破壊するか逃避するか。リーダーはパラノイド・パーソナリティの持ち主で、「内・外敵がいるので自己防衛か逃避が必要」という観念を支持しないとイケない。軍隊が典型

ペアリング(pairing)：あるカップルから生まれる誰か（救世主）乃至これから起こることが問題を解決してくれると期待。貴族が典型

※実際はこれらがそのまま存在するのではなく、作動グループをへてより高次の社会グループ（自我論でいえば成熟した自我に相当）に成長して存在する。だからこれらがそのままの形で見られれば退行的といえる。ただし、この世に教会・軍隊などが存在するのは、それらのspecialized work group（サブグループ）に、依然残る基底的問題の解決を委ね、それによって社会の残りの部分はこの問題から解放される、という仕組みによる。<sup>8</sup>

さて、この作品のサブグループ、サン・ナルシソに本拠を置くトライステロ(W.A.S.T.E., Yoyodine)は一見、メンバーが全能のリーダーを理想化し、その



ほれこんだ対象に自己愛リビドーを備給するというエコノミー<sup>9</sup>でできている平和な宗教的組織のようにも見える（都市の名前「聖なる・自己愛」の意味）。その主な業務は郵便というコミュニケーション、教会で言えば信者相互の教義に対する態度の確認のためのコミュニケーションのようだ。秘密の一つまり社会に対してサブの位置にある——依存グループのようである。いっぽうトゥールン&タクシスをめぐる前述のお話のなかに出てくるのは軍隊的な、悪い外的対象を仮定する闘争・逃走グループである。

このふたつのグループは一見別の水準にあるようだが、基底グループのそもそもの成立を考えれば表裏一体のものであることがわかる。さきほど、集団のなかに発生する問題の解決がそのグループのなりたちを規定するといったが、その問題とは基本的に、人々の対象関係に起因する欲求不満である。ここで、集団心理学と自我心理学は重なるから、後者に基づいた考えを適用して、その表裏一体を説明してみよう。

[図2]

オットー・カーンバーグによる自我の発達段階モデル

stage 1：自閉（autism）：良い自己＝他者表象（区別なし）

↓ 欲求不満の経験

2：共生（symbiotic）：良い自己＝他者表象／悪い自己＝他者表象<sup>10</sup>

（／は分離の意）

↓ 自他の分離

3 良い自己表象／良い他者表象／悪い自己表象／悪い他者表象

（部分対象）

↓ 自己表象・他者表象の統合、対象恒常性・抑圧・マイルドな超自我の獲得

4 自己表象／他者表象

自我心理においては、欲求不満は相手からの攻撃と感じられ、相手を悪い部分対象として認識する（赤ん坊が、おっぱいをくれないのを故意にくれない、自分を攻撃しているのだと感じる）。ところがこの赤ん坊の段階まで退行すると（集団では退行が起こる）、赤ん坊は無力で、庇護してくれる対象を必要としているから、相手に攻撃心を向けることができない（自分の攻撃心を認めら

れない、許せない)。そこで (stage2) そのような攻撃的自己＝対象の悪い側面を否認し対象の理想化をおこなう。他方攻撃心／悪い側面はとりいれられて内的対象 (超自我前駆) となるがその脅威 (悪いわたし) はもちこたえられない (自己保存できず、それでは元も子もなくなる) ので、原始的なスプリッティングの機構を使ってべつの対象へ投射し、攻撃的な悪い対象をつくる。<sup>11</sup>

ビオンの集団心理における basic assumption はこの段階に対応していて、依存グループは対象の理想化、闘争・逃走グループは悪い対象の仮設に対応し、両者は攻撃心への対応という点で同じ機制からできてきたものののだ<sup>12</sup>。

この説明から次の二つの議論が導ける。

①サン・ナルシソ共同体 (依存グループ) としてのトライステロと表裏一体のものとして、現実にはトゥールン&タクシスのお話にあるような軍隊のグループ (闘争・逃走グループ) としてのトライステロが存在し作動している。だから彼らは地下郵便組織 (W.A.S.T.E.) というコミュニケーション業務のいっぽうで宇宙・電子工学 (Yoyodine、「兵器の生産」を表象) という業務を司っている。

話はサン・ナルシソ共同体だけでは終わらない。アメリカも大きな依存グループという性格をもっているから。ヴァーバルな成立をもつアメリカでは、たとえばTVのブラウン管を通して、「建国の理念」だとかさきほどピングイッド協会のところでふれた「南部の理想」といったメッセージを神のおつげのように伝達することで統合を保ち、コマーシャルを流し商品を流通させることで経済を機能させている。そんなアメリカの理想を信奉する平和な消費社会のウラにもバラノイア的にできている闘争・逃走グループがあるのではないか？ サン・ナルシソとトライステロの関係はアメリカに遍在するのではないか<sup>13</sup>、それがピアス・インヴェラリティの異義“Inverse rarity”の意味である。

②さきほど述べた言語・象徴体系の示差的な構築のありようは、闘争・逃走グループのバラノイド機制と本質的に同一である。グループにとっての悪い外的対象は、それが事実脅威の性格をそなえているというより、悪い内的対象の原始的投射によってつくられ<sup>14</sup>、それゆえ、その際 (宣伝などによって) 「異質」な外的対象に付与されるイメージはその実、自グループと同じ材料でつくられていながらその要素のひとつを意図的にずらし (つまりは反転させ) たヴァリエーションにすぎない。

だからこそ「ミュート (消音)」が肝要になる。『ビオン入門』が記述するよ

うに、「[闘争・逃走] グループはある機構を採用して、『敵』がいかなる形にせよ現れるのを避けようとする」<sup>15</sup>というわけだ。問題解決のためのパラノイア機制の鍵はそれが幻想であることにあって、敵がその実際のすがたで現れて対処されたとき（あるいは現れないこと、つまり存在しないことがわかったとき）自己差別的ななりたちは失われてしまう（またメンバーの不満を集中して排出する点であることもやめてしまう）。エディバが近付いていくと、ちょうど軍隊や教会が来るものを拒まないように、トライステロはメンバーになるに必要なだけの情報、辻褃の合った情報を提供してくれる。だがそれもある程度までで、その根本の成立という機密・秘儀を明かそうとする努力は沈黙の壁によってはねかえされる。前掲 *The Courier's Tragedy* で話が湖の底の人骨、第二次大戦のイタリア戦線のメタファーである現実レベルのそれへと及んだ瞬間に、雰囲気はひえて何も語らなくなるとするのはそういうわけである。

敵同様、起源も消去（ミュート）されねばならない（もともとないわけであるから）。ピオンの言葉を借りれば「闘争・逃走リーダーは死後もなお従われる。なぜなら彼の死は、リーダーシップの行為だからである」<sup>16</sup>。リーダーの死によって意味の付与者の実体化を防ぐことで、この種のグループはよりよく機能できるのだ。すでに死ぬ前にエディバに掛ける電話で多元化したアイデンティティを示していたピアスは、その死によってグループ内により遍在を強め（“inverse rarity”）、消去装置のミュート・ラップもまた遍在する<sup>17</sup>というわけである。

## 2. 2 アメリカ社会とパラノイア

①②から、集団心理を通して象徴レベルの話が現実レベルに重なってくるという仮説が得られる。アメリカ社会の裏に、言語類似的に構成されたトライステロ的なものがあるはず、いいかえればトライステロ／トゥールン&タクシスの機制のつくるアメリカがありそれが現実と重なっているはず、というわけである。

①の議論を検証するようにこの後テキストは進行していく。ナチスのイメージ群。過去の罪業に怯え、ユダヤ人が攻めてくるという幻想に走るヒレリアス博士(187/137)。サープラス・ショップの販売する鉤十字、ライフル銃(187/149、ナチス+パラノイア)。

ナチスの対ユダヤ人政策というのはメラニー・クラインの「パラノイド＝シ

ゾイド・ポジション」の説明によく例として使われるもの<sup>18</sup>。異質な迫害の対象（ユダヤ人）が自我を攻撃する、という形で外に投影して国中をパラノイド・ポジションに押し込んで、自分の攻撃性／死の本能および国内の不満を処理した、というわけである。そうしてみると冷戦時代のアメリカはソ連を仮想敵としたパラノイアによって国全体が構成されている。さきほどの引用では北部とロシアが手を結び、南部すなわちファローピアンのあるところのアメリカの建国理念に反抗していたとあった。建国理念といえば、南部とは別にピューリタニズムもその表象とされるが、そちらを用いて隠喩的に説明している一節もある。

ロバート・スカークヴァムはチャールズ一世の治世にたいへん純粋なピューリタンの一派を樹立した。彼らの中心問題は予定説にかかわっていた。二種類あった。スカークヴァム派の人間にしてみれば、いかなることといえども偶然に起こるのではない。世界は壮大で複雑な機械である。ところがその一部、スカークヴァム派の人たちは、その根源的原動者たる神の意志に基づいて動いている。残りの部分はそれと相反する何らかの＜原理＞— 盲目的で魂のないもの — に基づいて動いている。これは永劫の死にいたる狂暴な自動運動なのだ。（中略）

「〔略〕アンジェロの欲望に逆らうことを言っているだけだとすれば、何ということはない、いくらだって逃げ道はある。アンジェロだってただの人間に過ぎないんだから。けれども狂暴なく他者＞— 非スカークヴァムの宇宙を時計仕掛けのように動かしつつづけているもの — これのことだとなれば話は別だ。どうやら彼らはトライステロという言葉が、この＜他者＞をうまく象徴すると感じたんだ」（195/155）

ピューリタンによる、他者の仮設にもとづくアメリカの構成（教会vs.闘争—逃走グループ。＜他者＞にトライステロを充てる）。アメリカは示差的意味体系、パラノイアの機制が現実となっているもの<sup>19</sup>。このように、平和な消費社会の日常の下にある闘争—逃走的な部分が暴露され強調されてくる（「アメリカの理想」をいうファローピアンのパラノイア性を見よ）。

そこで、作品の最後にエディバがアドレスする疑問については次のようにブラフフレーズできる：問題は、どう身を処すべきかだ。パラノイアを共有する人（アメリカ国民）にとっては仮想敵は外にある。しかしそのひとつであるトライステロ（トライステロはロシアと同じように、それ自体アメリカの仮想敵のひ

とつである)について、その意味体系を作ってみた私エディパはそれが外なんかじゃないことを理解した。トライステロ／アメリカは裏表。前者は後者を示差的になりたせるもの、complementaryなものである。そして両者ともそれ自体、自己差異化にもとづく外的対象のパラノイド的仮設の機制という点で同じである(だからピアスが合衆国のfounding father)。そのいかがわしさに目をつぶってパラノイアになれというのか? 「エディパが存在を続け、少しでもアメリカにつながるようにして行く唯一の道は、一人の異邦人として、畝を立て溝を作られることなく、完全に何かのパラノイアに呑みこまれることだ。」(228/182) ならむしろ「こっちはいま幻覚のまっさいちゅうよ、そのための薬なんかおことわり」(18/17)とヒレリアス博士の実験を断り自身の幻覚のなかにあるとするエディパのほうがまともなのではないか? —これが、読者に投げ掛けられる疑問である<sup>20</sup>。

### 3 ヒロインの経験

#### 3. 1 疎外と包囲

ただし、こう書くと理性的な判断の問題だが、実際は内にいるエディパの体験するかぎりでは良心の問題などではなく、選択の余地などない。象徴界、言語的な定義から言えば徹底して恣意的で主体にとってエイリアンなそれと、所与の「つねに、すでにそこにある」現実界(これに直面することはそれだけで狂気を誘発せずにはおかぬほどの恐怖)。テキストの上でこの二つが重なるとき、エディパにとってその言語的なものが生のまま、生の現実として立ち現れ、破壊されたエディパル・ステージが体験される。「すべて幻想であってほしかった」(164/132)、「心の病であればいい、それだけのことなんだと思いたかった」(214/171)と望むエディパ。でもそうじゃない。現実と重なって、ずれている<sup>21</sup>、ということは逃げ場はない。

この時エディパの知覚を想像すれば、ラカンの有名な一節「無意識は言語のように構造化されている」<sup>22</sup>風に、AとA'の連鎖がシニフィアン同士、体系同士、ちょうどフラクタル状に続いているのが見えるだろう。外から眺めればそれはたんにうんざりさせるだけで、もしそれに耐えられるならば、自己差異化(示差)のパターンは分かっているから大した脅威ではないと思えるかもしれない。敵といったところで、どうせ本当に異質ではないのだし。だが内部にいるエディパにとってその要素(シニフィアン・集団・人に相当)のひとつひ

とつが事実闘争—逃走グループにおける自グループにとっての外敵、自我にとっての悪い対象、つまり主体にとって真に異質な、エイリアンなもの、脅威として知覚されている。そして、(今言ったことは内部にあるほかのメンバーでも同一だがエディバの場合特異なのは、) 内部にいつつ覚醒してしまっているエディバにとって、さらにその体系—構造(自分の今いるフラクタル構造)自体が恣意的・無根拠、エイリアンなものとして理解される。それはたんにいかわしいだけでなく自己に対する真の脅威として感じられるはずである。この体系—構造が果てしなく連なり、どこを探しても見出だされるのがわかっているとすれば……。どうだろう、それはビオンの記述する、二次的スプリッティングと投射を蒙った“bizarre objects”の群れ<sup>23</sup>に水平にも垂直にも、別の言い方をすれば一次的にも二次的にも自己が囲繞されるという状況にほかならない。

これは主体にとって徹底してエイリアンに感じられながらもそこから抜け出すことを許さないような、そんな構造である。エディバは外敵・悪い外的対象に怯えつつもそれが本当に異質ではないはずだ(あるいは実在でないはずだ)というからくりには(一次的に)気付く。しかし彼女自身を含んでいる体系が、彼女とは関わりなく(つまり恣意的に)そう怯えることを規定し命じていて、この体系のエイリアンさ(またそれゆえこちらからは何の抵抗もできないこと)に気付いた彼女に二重の脅威を感じさせる。読者が彼女に感情移入して読めるならば、このパースペクティヴに小説の最大の迫力が感じられるはずである<sup>24</sup>。

このような状況下のエディバ、「何もかもが私に対して変化してきているんですもの。でも、私を憎むまでにはなっていなかった」(211/168)「もうおしまい(中略)彼らが私を集中攻撃してるの。これからは彼らを閉め出すしかないわ」(221/177)。ここでエディバがなりかかっているのは、ほかのキャラと同じパラノイアのように見えてもそうではなく、本当は彼女固有の認識からきた彼女自身の病理である<sup>25</sup>。

### 3. 2 自我の崩壊

ここで今一度エディバの視点から客観にもどると、読者は次のことを理解する。エディバから見れば体系に抵抗できないのはそれがエイリアンと感じられるからだ、これもほんとうはエイリアンなのではなく、自己差異なのだ。エディバ自身の自己も体系同様に、体系によって、示差的に構成されている<sup>26</sup>。エディバが体系に抵抗できないのは、そうするのがさきにモデルをもちいて説明し

た自我の言語的（差別的）構造を否定し破壊することになるからである。だから、仮にそうできるとき彼女はすでに精神病理に陥っているはずである。

これをふまえて上の部分をリアルな文脈で言いなおすと次のようになるだろう：発祥から冷戦構造時代にいたるまで、アメリカは、日常生活を円滑に機能させるマス・コミュニケーションと流通機構の裏で、それを補完する形で、自己差別的な機制によって仮想敵のイメージをつくりあげるといふ、言語的な国家構造を作動させてきた。社会の存続からいえば問題解決の幻想を提供するうまいメカニズムだが、いかがわしいものである。斜に構えた観察者たる作家は当然これを批評する。だが、シニクだけでは駄目なのだ、なぜなら現実に機能し信条として信じられているこの機制は外の集団との関係において現実に危険を生み、ともすれば自集団にとって、さらには構成員相互間でさえ（ヒレリアス博士の例）、脅威を生み出すものだからだ。そこにまで批評の錘を届かせるためには、機制を与件としてその中で生きる主体にとってはこの機制がいかに効力を発揮しているかを見なければならぬ、そしてそれに違和を感じるメンバーにとって、自らが引き受けるはずのものに背反することがどんなことかを見なければならぬ（それはたんに周囲の社会が自我異和的に立ち現れるということにとどまらず、自己が自己に対立することでさえある）。これは革命家が目覚めるといふようなことではなく、もともと素因をもった病前性格者が病理になるという形で表現されるにちがいない。そこまで書いているところにこの作品の、たんなる社会批判をこえた文学としての力がある。

この作品に関しては従来「ずらし」（たとえば郵便組織による配達の遅延といったもの）のもつsubversiveな力や差異の並列を肯定的に評価する批評が多く行なわれてきた。私はあえてずらし・差異化の機能について逆の見方——人を虜にするものだ——を提示したわけだ<sup>27</sup>。そんな呑気な脳天気なことを言っていていいのか、この小説はもっと正当な、リベラル本流のような発想から真剣に愚直に書かれているのではないかというのが私の見方である。

### 結論：

トマス・ピンチョンは自己の幻想を語る人でなく、世界のなりたち・文学のなりたちを語るコンセプチュアルな芸術家である。

① 自己差異化によって成り立つシンボリックな組織で、それゆえ敵視される対象との関係や主体の疎外という面で精神病理的な問題を生む、というアメリ

カ社会の抽象的本質（そこでは主体そのものさえ同一の構造で自己を疎外する（註26参照））。

② 現実界からの一撃をめぐって作家は象徴作用を展開し（ことばを連ね）、把握かつは無害化に努めるものだが、それらの象徴は作品内にあって（キャラクターにとっては）リアルとみなされる。

③ ①のような社会分析を②の文学というヴィークルに乗せることで、主体を疎外する記号の連鎖が主体（キャラクター）にとって「リアル」（生々しく、逃げ場がない）として立ち現れる状況が現出する。かりに覚醒した主体にとって、社会の機制は無根拠な象徴にすぎないことが理解されるが、にも拘らずそれらは容易なシンボライゼーションを拒む物自体として暴力的に主体に働く。覚醒した意識は社会の転覆より自我構造の病理的崩壊を導く。

④ ③は文学論でありながら現実の社会・自我の表象たりえている。現実の社会にあっても撃つべき標的（権力の根源）は無いようであるし<sup>28</sup>、自我も商品＝記号の連鎖によって社会化／構造化された消費欲動マシンとなり果てているようだ。内面・外界の区分はもはや無効である<sup>29</sup>。それゆえこの作品の批評的成果は大きかった。

### 註：

- 1 inveracity を pierce する、というこれが Pierce Inverarity という名の意味になっていることは訳者志村正雄氏をはじめ、先行研究の指摘するとおりだが、異義“inverse rarity”の意味するところについて私はこの後の論述で考えを述べてみたい。
- 2 以下、引用は論述を滑らかにする必要上（慣例に反するにもかかわらず）志村正雄氏の翻訳（筑摩書房、1992年）による。括弧内のデータは順に①翻訳の頁②Harper & Row/Perennial Library pb版(1986)の頁。
- 3 cf. 「エディバは、キナレット市を出てくるずっとまえから、海が南カリフォルニア（もちろん彼女が住んでいる地域は別で、そんな必要はなさそうだ）に対して救済となるという原理のようなものを信じていた。海の縁に対してどんなことをやったとしても、真の太平洋は汚れることなく完全なものとしてあり、どこの縁の醜悪さをも引き受けて、何か、もっと一般的な真実の中に包みこんでしまうのだという、声なき思いのようなものだった。」(66/55)
- 4 「数々の啓示がいまや指数関数的に殺到し、集めれば集めるほど多くのものがやってくるという感じになり、ついには見るもの、嗅ぐもの、夢みるもの、思い出すものの、一つとしてどこかで<ザ・トライステロ>に織りこまれないものはなくなってしまった。」(99/81)
- 5 劇や「マックスウェルの悪魔」の実験(129-32/105-07)にも同様なしくみ・起源の消



去の例が見られる。

- 6 だから人はファルスを求める（そして得られない）とラカンは言うわけだが。
- 7 クライン派の自我心理学者であり、かつ集団心理学者でもあるビオンの業績は、この両分野を結びつけようという本稿の試みを裏書きしてくれるようだ。
- 8 グリンベルグ他『ビオン入門』13-32頁。カーンバーグ『内的世界と外的現実』のビオン紹介（下巻277-88頁）もわかりやすく示唆に富む。
- 9 ほれこむと対象（リーダー）が自我同様に扱われ、自己愛リビドーが注がれる。対象は自我理想のかわりになる。
- 10 いわゆる良いおっぱい／悪いおっぱい。（笑）
- 11 カーンバーグ『対象関係論とその臨床』44-75頁。皆川邦直「前青春期より初期・中期青春期における境界例」171-219頁（小此木編『青年の精神病理』第2巻所収）にもカーンバーグとマスターソンによる自我の発展段階モデル（及び境界例人格構造のモデル）の明快な解説がある。これらは現在の発達／認知心理学の知見ともある程度の整合性をもつ。
- 12 依存グループを皮むけば闘争・逃走グループが出てくる。フロイトが、軍隊がパニックになると不安が出てくるのに対し教会組織がパニックになると攻撃心の発露が見られると書いているが、こういうわけである。（フロイト『集団心理と自我の分析』著作集6、215-18頁）誤解を避けるために言えば、これはアンビヴァレンスの話ではない。アンビヴァレンスは同じ対象を良くも悪くもあると認識できる（攻撃心も向けられるし、悪い扱いでフラストレーションを受けても耐えられる）ことで、対象表象の統合ができてから（対象恒常性が確立した後）可能な、高次のstage4の段階である。
- 13 「もしもサン・ナルシソ市とその土地がほんとうにどんな町、どんな土地とも変わるところがないとするなら、その連続性によって、トライステロは彼女の国のどこにも存在し得たのだ。一百の、そっと隠された入口、百の疎外を通じて、彼女が覗きこみさえすればいいわけだ。」(224/179)
- 14 リフレイン：「私は世界を投射すべきか？」(100など)、その意は「私も集団パラノイアに参加すべきか？」
- 15 グリンベルグ同書24頁。
- 16 原文の文脈でこの文の意味合いは、ここで使用したのとはやや違っている。「[マクドゥガル説は] 恐慌状態は闘争～逃避集団の一つの側面であるという私の見解を支持している。パニック状態と逃避および制御されない攻撃はまったく同一のものであるというのが私の主張である。（中略）『絶対的に戦いから抜け出す方法は死ぬこと以外にはない』。将軍の死につづく恐慌状態的な逃避の物語には、『闘争～逃避』リーダーへの忠誠心とは相容れないと見なされるものは何もない。『闘争～逃避』リーダーは死後もなお従われる。なぜなら彼の死は、リーダーシップの行為だからである。』（ビオン『グループ・アプローチ』193頁）
- 17 「ピアス・インヴェラリティはほんとうに死んだ。  
「彼女は高速道路と平行して延びている鉄道線路の上を歩いて行った。あちこちらで引き込み線が工場所有地へと走っている。ピアスはこういう工場も所有していたのかもしれない。でも、いまになってみれば、彼がサン・ナルシソをぜんぶ所有していたとしても、どうってことはない。サン・ナルシソというのは名前に過ぎな

い。わが国の、風土的な夢の記録の中の一つの出来事。わが国の日の光の集積、一瞬のスコール前線、あるいは竜巻きの接地などの中で夢が変化したもの。さらに高度の、さらに大陸的な儀式 — 集団の苦しみと欲求、富の卓越風といったものの暴風システム — の中で夢が変化したもの。真の連続性があるのだ、サン・ナルシソに境界線はない。だれもまだ境界線の引き方を知らない。彼女は何週間もまえから、インヴェラリティの残したものの意味を理解しようといっしょうけんめいだったが、その遺産がアメリカであるとは思ってもみなかった。」(222/177)

- 1 8 クライン学説は先程のスプリッティングの段階とほぼ対応し、違いは各発達段階の設定時期や、攻撃心が欲求不満から派生するのでなく乳児自身の加虐性（フロイトのいう生得的な「死の本能」）から生まれるとする点。
- 1 9 エンディング、「大きなデジタル・コンピューターのマトリックスの中を歩いているみたい」な、「1 たちと 0 たち」(227/181)からできているアメリカ。
- 2 0 cf. 「ネファステイスなんて気違い、もういい、正真正銘の気違い。真の霊能者っていうのは人間の幻覚を共有できる者のこと、それだけの話。」(132/107)
- 2 1 前掲引用(20/21)、及び「この町 [サン・ナルシソ] と南カリフォルニアのほかの場所と、重要な差異があるにしても、最初の一瞥では見えない。」(25/24)
- 2 2 Lacan, *The Four Fundamental Concepts of Psycho-analysis*, pp. 149 & 203.
- 2 3 bizarre objects (奇怪な対象群) 発生のメカニズムについての説明は付録後半を見よ。詳しくはスィーガル「メラニー・クライン入門」77-79 頁、グリーンベルグ同書 37-41 頁、カーンバーク「内的世界と外的現実」(上) 34-40 頁が参考になる。
- 2 4 逆に言えば、もし自我の構造に及ぶ分析がなかったなら、この小説は冷戦時代を扱った他の文学作品（や映画「博士の異常な愛情」などバラノイアもの）と異なるところが少なかったらということ。別の視点からいえば、この小説が下敷きになっているのがかなり明白なボルヘス「トレーン、ウクバル、オルビス・テルティウス」(『伝奇集』所収) に対して、独自性を主張するのが困難だったらということ。そこでボルヘスはグノーシス的別世界がレトロウィルスの流儀で現実を蝕んでゆくさまを描き、きわめて新しい。ボルヘスからの影響は周知だが、『伝奇集』にかんしては他に次の点が指摘できる。主題面では、見分けがたい秘密結社（「フェニックス宗」）。手法面では実在の事実・人物・著作の自在な引用をはじめ、要約された偽書の提示の仕方（「隠れた奇跡」等）。
- 2 5 付録中の引用(127/103)とその前後の論述を参照。
- 2 6 このような形で個人の内面と外界の区分が消失することについては、レイチェル・ボウルビーがベンヤミンを換骨奪胎して論じるところだ。[かつて産業社会の成立とともに、「大産業」の浸透に抗する形で個人の私的領域・特権的内面の神話が形成されたのだが、] 産業 [生産] 社会から消費 [流通] 社会への移行に伴い、商品は使用価値よりも相対的差異にもとづく交換価値を売り物にするようになる。この時商品の消費者として第一に意味付けられる個人の内面もまた、外界同様に、欲望させる商品＝差異記号の連鎖によって構造化されてしまう（ボウルビー「ちょっと見るだけ」第2章、米塚「消費文化と女」196頁）。主体と客体の区別の消失についてはオギュスタン・ベルクも（おそらくはフーコーの影響下に）西洋思想の変革の上から論じている。かつてデカルト的主体の誕生（客体から距離をおくこと）が風景の誕生と時を同じくしていたが、二十世紀にあっては主体自身の主観性に対する

第二の距離設定（すなわち主体内部における非主体の存在の発見）が風景の観念の危機を招いた。後者の表現がフロイトの無意識の発見であり、セザンヌにおける主体＝主題(sujet)の危機である。そこでは理想的観察者という視点が放棄され、主体は風景の内部に入りこみ局所的な関係に基づいて位相的に定義されるものとなる。ポストモダンへの移行（ベルク『日本の風景・西欧の景観』第3，7章）。いずれの議論も *Crying ...* の提出する問題の今日性や、西洋思想のメインストリーム上にあることを証拠だてるようだ。

- 27 註29で述べるようにピンチョンの世界像はドゥルーズのそれに似るが、一方で差異や記号についての考えかたは随分異なっている（それはむしろボードリヤールの、それゆえベシスティックである）。だから差異についてのドゥルーズ流の評価をもって *Crying ...* に対するのはミスリーディングなのだ。
- 28 あるいはフーコー『監獄の誕生』以来、そうみなされるようになった。
- 29 ドゥルーズとガタリは『アンチ・オイディプス』で同様な事態を扱っている。①社会が生産する表象を個人の意識がひきうけることで、主体の疎外が発生する。ただし彼らによれば、それは歴史的な所産というより人間の本来的なありようだ。社会と個体とはもともと同一の「欲望機械」だから。②為政者ないし資本主義社会のもたらす表象に自らを積極的に合わせていく態度がパラノイアである。それは同時に、他人に同調を要求するファシズムとなる。③ファシズムによって全体化の完了した暁には、個人＝社会は均質な「器官なき身体」となり死を迎える（ピンチョンのエントロピー理論でいえば「熱死」）。①～③から分かるように、*Crying ...* の提供する思想的見取図と、その六年後にパリで出版されることになる『アンチ・オイディプス』のそれとはきわめて近接している。ぜひ対照されたい（註27も見よ）。

## <付録>エディパのパーソナリティについての所見

今、エディパは革命家ではない、もともと目覚めているのだと言った。なぜ、どんなパーソナリティのゆえに、エディパは所与の象徴体系が主体に対してもっている本源的な *alienness* を認識できるのか。それは共同の幻覚＝象徴体系を共有していないという点でである。

次の引用はエディパがカリフォルニア州立大パークレー校を訪れた場面。一見、「異邦人」であるエディパは無自覚で、大学生のほうが意識的でラディカルに見える。あふれるスローガン。

地面までぶらさがっている長い紙に書かれた陳情書、F S M（言論の自由運動）だの、Y A F（自由アメリカ青年会）だの、V D C（ベトナム終戦委員会）だのと、何の略字だかわからない団体のポスター、噴水盤には抗議のためにおちこんだ洗剤が泡を立て、学生たちは鼻を突き合わせて語っている。エディパは其中を歩いた。厚い本を抱えて、興味を惹かれながら、不安な気持ちで。異邦人。（中略）エディパが

教育を受けたのは臆病、退屈、後退の時代であったからだ。それは同僚の学生のあいだだけのことでなかった。彼らのまわりにも、彼らの前方にも、目に見える機構の大部分がそうなのだった。それは権力の上部に蔓延するある種の病状に対する全米的な反応だったのだ。それなのに、このパークレー校はエディパ自身の過去から思い出される退屈な大学とは似ても似つかず、むしろ報道に出てくる、あの極東やラテン・アメリカの大学に近い。それは自律的な文化機関で、どんなに身近な民間伝承も価値を疑われ、大変革を起こしそうな反体制意見が表明され、自殺的な行為が選択される — 政府を倒すといった種類の — そういうことがありうる場なのだ。(127/103)

ところが、このように言語で動いている当世の大学生というのは、社会的規範を身に引き受けることで自己愛をうまく社会化できているにすぎない（インシャル→「記号」）。その通路がエディパにはない。だから既存の枠組みをかぶせて解釈するかわりに体系を再構成していく。そのうちに体系の示差的な作られ方をラディカルに見抜くことができ、逆説的認識者となれるのだ。

さて、社会の与える役割同一性を受け取っていないということはアイデンティティの希薄さを意味する。また、エディパは彼女の象徴体系・ファロスへの関係性ゆえに、欲望を言語化しない／言語化されていない存在である。たとえば遺言、つまり他者の欲望で動くという点がそう。また他者に欲望を起こさせる存在というのもそう。エディパはそれとなく誘惑したりされなかったり、いずれにせよ欲望を明言することはないが、出会う男性ごとに欲望を喚起してしまう存在である（これは次に述べる投影同一視の機制と関わっている）。

これら identity diffusion、言語化の不能／されていないこと（及び投影性同一視）は境界人格障害(borderline personality disorder, BPD)の特徴である<sup>1</sup>。

この障害は図2 カーンバーグのモデルでstage 3 から2 への退行が起こるものをいう。その大きな特徴となるのが投影同一視の機制である。一般人ではさきほどふれたように、取り入れられた悪い自己＝他者表象（超自我前駆、脅威になる）を外に投射して自己をそれから解離するだけですむのだが、境界人格障害の患者は親との関係がうまく行っていないので、十分な良い自己＝他者表象を育てるだけの愛情供給を受けていない。そこで悪い自己＝他者表象を投射した相手を実際に操作してその悪さを実際につくりあげることで、比較して良い自己＝他者表象を活性化させることが必要になる。

一例。「悪い自己表象」をBPD診断の場合にはJ・F・マスターソンの用語

<sup>2</sup>で愛情撤去型表象と呼ぶ。子（患者）が親から自立しようとする（無力になるから）駄目、従順ならいい、という表象であるわけだが、セックスを行なうことも撤去型に含まれる。これを避けるため、セックスの際患者は自分で相手を誘惑しておいて「向こうが誘惑したんだ」という投影同一視を行なう。自分の欲望はそうして、抑圧によってでなく否認することができる。そして「わたしは良い（相手が悪い）」というわけだ。

エディパもといったこのような態度を、alloplastic（周囲変容的）態度と呼ぶ。超自我の働きもないために、患者は自我を変容させることはなく、代わりに環境を変容させることになる。これが精神病や神経症と比べてBPDの大きな特徴になっている。精神病(stage2→1への退行)の場合は、内的な願望にしたがって外的対象についてのイメージを作る。外的対象はたんに否認されるだけで無関係。つまり実際につくりかえられたりすることはない。神経症の場合は(stage4→3)超自我のはたらきでみな内的に処理し、人格の内面に問題が発生する。これに対してBPDは誘惑のように、現実には外的対象に働きかけてつくってしまうのである。

この作品で、パラノイドである国民がいまいった精神病的機制を採用しているのに対し、エディパがBPDに相当するとみなせる。投影同一視によって内面と外部の区別のなくなる点は象徴とリアルの重なりに符合する。

さらにBPD患者において、悪い対象が特に強く攻撃心が強い場合、投影同一視がゆきすぎて周囲が迫害者だらけになり、逆に自我がどうしようもなく貧弱に感じられる（自我も分裂）場合がある。エディパが極限状況に直面して“bizarre objects”に囲まれる結末もこれに対応するとも考えられる（集団パラノイアに参加するのではなく、彼女自身の病理としてそうなるというのはそういうわけである）。

BPDは六〇年代の学界の対象関係論ブームに乗って注目を集め、八〇年代に入りマスメディアのレベルでも現代病として話題になった。アメリカ的な病といわれる。そもそものは幼児虐待など家庭環境の悪化から増加したのだが、症状の中核となる見捨てられ不安（親との関係が安定しなかったから）とアメリカ社会固有の都市の孤独との関係、障害のアクティング・アウトと社会の衝動性・消費社会・セックスとの関係などが指摘されている。それをここでピンチョンがとりあげたのだとすれば先駆けといえるだろう。またそれ以上に、註26で述べたように、内・外の区別の消失はベンヤミンの予告した、産業社会が

ら消費社会への移行にともなう自己の「社会化／相対的差異によるシンボリックな編成／疎外」に対応する。主体・客体の区分の崩壊はフロイト以来の西洋思想の変革の一端につながる。

### 付録・註

- 1 境界例パーソナリティ・モデルについて、詳しくは本文註 11 に指示した文献を参照されたい。
- 2 マスターソンの解説についても同所皆川論文、またはマスターソン『青年期境界例の精神療法』3-45頁。

### 引用文献

- 小此木啓吾編『青年の精神病理』2、弘文堂、1980年
- カーンバーク、オットー『対象関係論とその臨床』前田重治監・訳、岩崎学術出版社、1983年
- 同『内的世界と外的現実』上・下、山口泰司監・訳、文化書房博文社、1992-93年
- グリンベルグ、L、D・ソール、E・T・ビアンチェディ『ビオン入門』高橋哲郎訳、岩崎学術出版社、1982年
- スィーガル、ハンナ『メラニー・クライン入門』岩崎徹也訳、岩崎学術出版社、1977年
- ドゥルーズ、ジル、フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳、河出書房新社、1986年
- ビオン、ウィルフレッド・R『グループ・アプローチ』対馬忠訳、サイマル出版、1973年
- Pynchon, Thomas. *The Crying of Lot 49*. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1966. reprint: New York: Harper & Row/Perennial Library, 1986. (トマス・ピンチョン『競売ナンバー49の叫び』志村正雄訳、筑摩書房、1992年)
- フーコー、ミシェル『監獄の誕生』田村俣訳、新潮社、1977年
- フロイト、ジークムント『著作集』6、井村恒郎他編・訳、人文書院、1970年
- ベルク、オギュスタン『日本の風景・西欧の景観』篠田勝英訳、講談社現代新書、1990年
- ボウルビー、レイチェル『ちょっと見るだけ』高山宏訳、ありな書房、1989年
- ボルヘス、ホルヘ・ルイス『伝奇集』篠田一士訳、集英社ギャラリー「世界の文学」19、

1990年。鼓直訳、岩波文庫、1993年

マスターソン, ジェームス・F 『青年期境界例の精神療法』作田勉他訳、星和書店、  
1982年

米塚真治「消費文化と女」『イマージュ』1994年1月号

Lacan, Jacques. *The Four Fundamental Concepts of Psycho-analysis*, translated by Alan  
Sheridan. reprint: Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1991.

※この論文は1993年6月25日、日本アメリカ文学会東京支部・二十世紀小説部会で行なった研究報告に補筆したものです。